

小説太平洋戦争

6 帝国の終焉

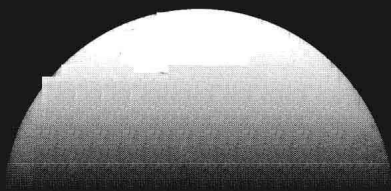
山岡荘八



山岡莊八

説太平洋戦争

国の終焉



講談社

新裝版

小説太平洋戦争 6 帝国の終焉

昭和五八年八月五日第一刷発行

定価七八〇円

著者—山岡荘八 © 一九八三 藤野稚子 Printed in Japan

発行者—加藤勝久



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二二— 郵便番号 一一二 電話東京(〇三)九四五—一一一(大代表)
振替東京八一三九三〇

印刷所—豊国印刷株式会社 製本所—株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

小説太平洋戦争

6

● 帝国の終焉

目次

祖国の危機！ 本土決戦の構想

11

祖国の危機！ 近衛特使派遣の真相

31

祖国の危機！ 原爆投下とソ連の参戦

51

祖国の危機！ 八月十日未明の聖断

71

ポツダム宣言受諾の経緯

91

あゝ、八月十五日

111

日本人の自決！

131

敗戦の衝撃と混乱

151

連合軍進駐す

171

東条大将の逮捕

191

戦犯旋風的美醜

211

巢鴨監獄の友情

231

近衛文麿の死

251

七人の絞首刑始末(一)

271

七人の絞首刑始末(二)

291

満州国の終焉(一)

311

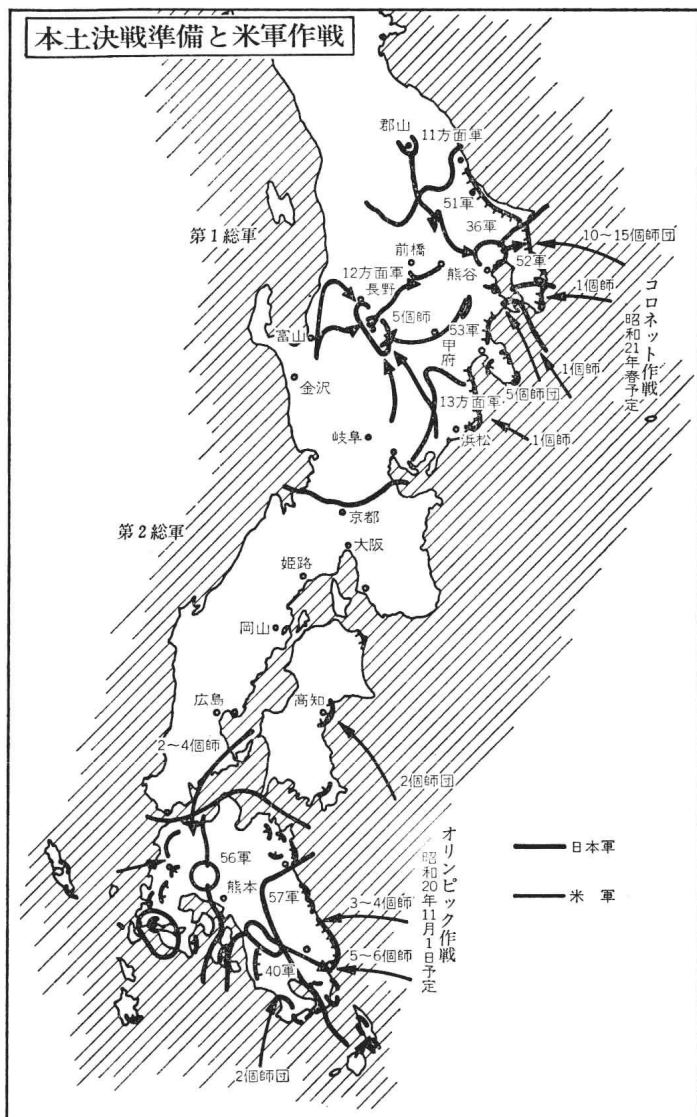
満州国の終焉(二)

331

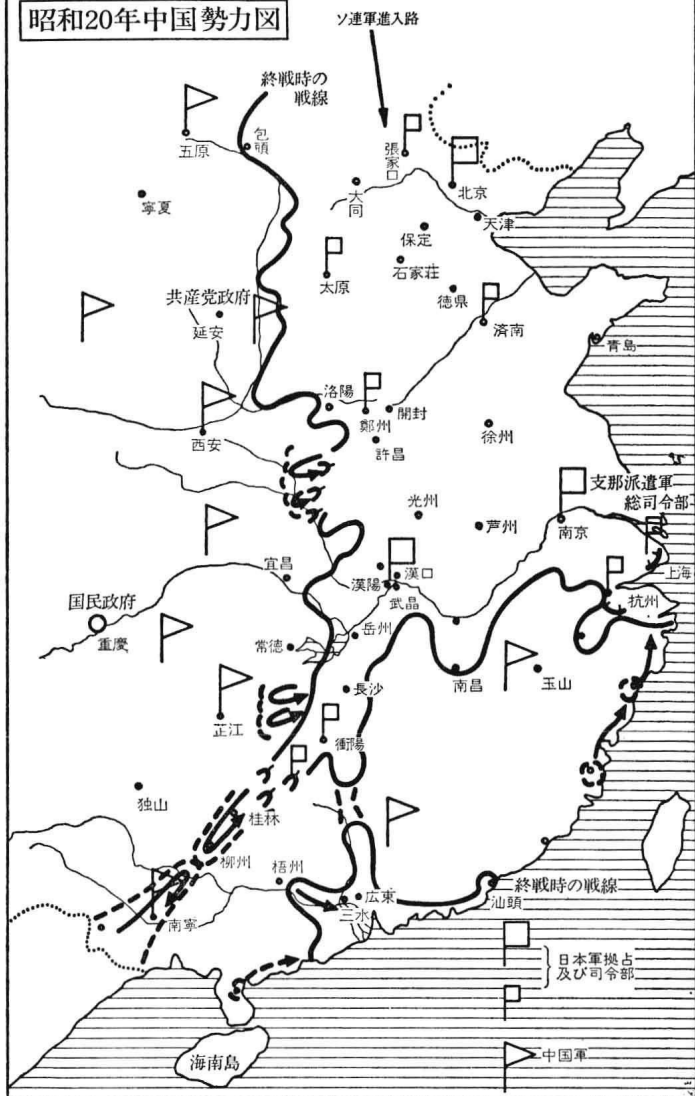
満州国の終焉(三)

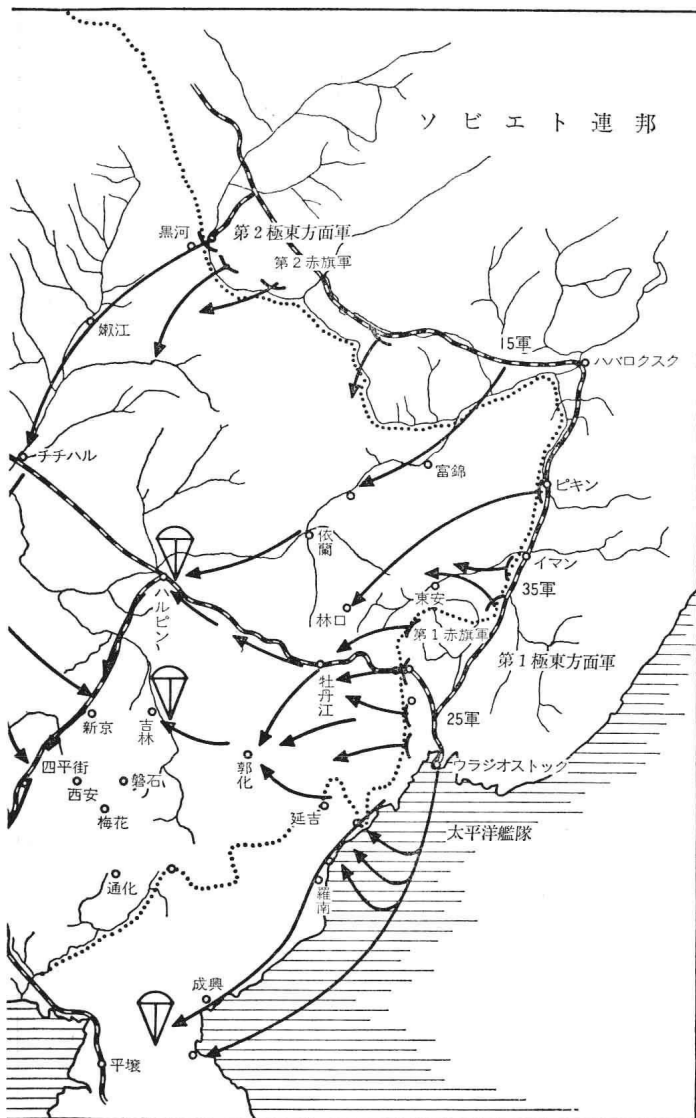
351

本土決戦準備と米軍作戦



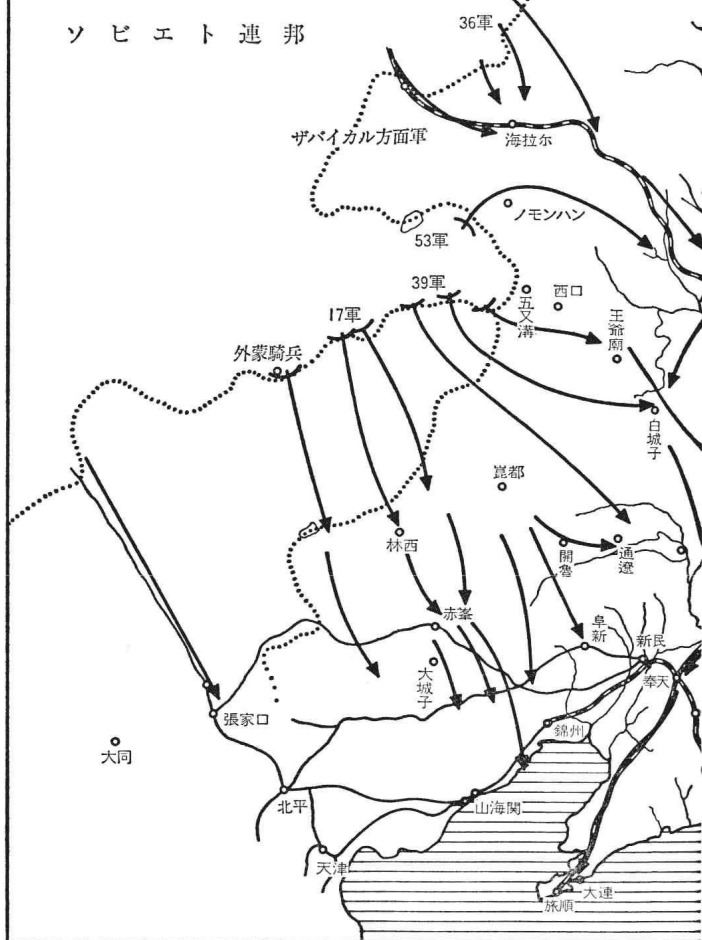
昭和20年中国勢力図





20年8月ソ連軍の満州侵入要図

ソビエト連邦



装幀 小松桂士朗
装画 鈴木誠
挿絵 田代素魁(光)

小説太平洋戦争

6

帝国の終焉

この小説における国名、地名、関連する事件、事変等の記述はすべて当時の一般的な呼称に従ったもので、本書は昭和四十年から四十六年にかけて刊行された原本をそのまま復刻したものです。



祖国の危機！ 本土決戦の構想

1

沖縄陥落までの期間に、本土に加えられた爆撃のはげしさは眼を蔽わしめるものがあつた。

サイパン島から硫黄島への進出で、アメリカの長距離爆撃機、B 29の編隊が、次々に日本の都市を焼き払う。一夜あけると必らずどこかの地方都市が一つずつ、地上から姿を消してしまつていく。

「——今夜はどこがやられるか？」

六月以降は、全部の日本人が、戦々兢兢^{きょうきょう}として安眠どころか、防空服を着たままの夜を明かすのがつねになつてしまった。

戦争は日支事変以来八年間も続いている。どこ

の家でも応召兵を出したり、勤労動員にかり立てられたり、疎開学童を送り出したりしていながら、それまでの日本人は、まだまだ本当の戦禍は直接肌で体験していなかった。

それだけにこの空から加えられた爆撃と焼夷弾攻撃の衝撃は大きかった。

（これが本当の戦争なのだ……）

一夜にして家もなければ生計の手段もない。着たきり雀で焼け野原に抛り出されて、饑餓線上を彷徨しなければならぬ人々があふれてゆく。云うまでもなくその都度多くの人命が失われ、生き残った人々はその屍体の処理に駆り出された。

まっ先に狙われたのは東京、大阪、名古屋などの大都市で、東京を例にとると、最初に本郷湯島附近（十二月二十一日）をやられ、罹災者の話にびっくりする程度だったのが、三月十日、浅草から向島がやられたときには、人々はその惨状に慄えあがった。到底貧弱な防空壕やバケツリレーで対処出来るものではなかった。空から降りそぐ火の雨で、あっという間に遁げ場を失って焼け死

んだ人々が隅田川と街路をうずめた。隅田公園に累々と積みあげられたこれ等の屍体の始末に、私の住んでいる世田谷あたりからまで木炭トラックで出かけていった。何しろ罹災者百万、死傷十二万という大空襲だったのだ。

私の家の出入りの植木屋もかり出され、

「——戦争って、こんなにひどいもんだったんですね」

ふだん人権だの、法律だの、恋愛だの、生活だのと云っていたのが奇妙な気がしたというのだ。

「——要するに焼いためざしの山ですよ。臭くてたまらねえからトラックの上へさすまたで抛りあげて捨てて来る。その匂いがまだ手足に染み込んでいてたまらねえんです」

戸籍も性別も身分もあったものではない。しかし、嚴重に「口止め——」されて来ているからそれ以上は話せないと、捨てた場所や埋めた場所は云わずに身頼いするのだった。

私の知人の中にも、この空襲でブツリと消息

を絶つて一家で消えてしまったのが何組かある。

この東京の三月十日に続いて、十二日には名古屋がやられ、十三日には大阪がやられた。おそらく惨状は同じようなものであったに違いない。

六月半ばに私が鹿屋の航空基地から、東京の世田谷の自宅へ引きあげて来て、渋谷のプラット・ホームにおり立った時には、青山も目黒も三軒茶屋も、見渡す限りの焼け野原に変わっていた。

五月二十五日夜の十時三十分から約三時間の爆撃攻撃で、皇居から大宮御所まですっかり炎上してしまっていたのだ。

私は当然わが家も焼けたものと思い、どこに塀を求めようかとしばらく茫然と立ち尽した。ところが、その焼け野原の中に、不思議なことにわが家だけはポツンと一軒焼け残っていた。

ところが、こんどは、その焼け残ったことに腹が立つという奇妙な心理を経験した。焼けてしまえば身の振り方も決めるのだが、残ったばかりに防空壕住いの人々と一緒に走りまわらなければならぬ。

焼け残った幸運を呪うなどという感情は、おそらく戦時でなければ味わい得なかった異常な経験と云ってよからう。人間は時に幸運さえが煩わしくなるものなのだ。

サイレンは毎夜のように鳴りつづいた。

むろん東京だけでは無い。大阪、名古屋、鹿児島、西宮、浜松、豊橋、今治、宇部、岡山、熊本、門司、下関、延岡と焼き立てられてゆく。

私は壁に張った日本地図に次々に焼かれてゆく地方都市に×印をつけながら、焼け残った自宅で七月を迎えた。

そして、福井県の敦賀に×印をつけたところで、又大本営の報道部から呼び出された。

「——こうやられては士気も落ちるよ。ひとつ福井へ急行してくれないか」

「——福井へ何しに行くのですか？」

「——敦賀がやられたので、県民の士気がひどく沮喪している。激励して貰うのだ。行けばわかる。県で君を待っているからね」

とにかく福井へ急行して、県の農業会と連絡を

とれというのだ。

「——県民の激励ですか」

「——そうだ。いよいよ本土決戦に入るところなのに、弱気を出されちゃ困るからね」

私が「本土決戦——」という言葉に、否応なく関心を持たなければならなかったのは、この時からだ。

当然そうなりそうな気はしていたし、覚悟もしてはいたのだが、私までが、もうその中に組み込まれているとは思ってもみなかった。

大本営との連絡は、福井にある同盟通信の支局を通じて取ること。期間は十五日間、出来るだけ県内をくまなくまわって、士気鼓舞の効果をあげて来ること。

私は、あわててわが家に戻って、改めて四囲の空気の検討にかかった。

私の胸では、まだ、鹿屋から沖縄に飛び立って行った若者たちの顔、顔、顔が、なまなましく活きていて、戦争と、この若者たちの犠牲とをどう受け止めるかで、身動き出来ない思いの時だった

のだ……

2

私は改めてまず昭和二十年という年を、はじめから検討し直した。検討してみると、迂闊なことに、私は「特攻隊——」という特異な悲劇の出現と、都市爆撃という凄まじい戦争の罪惡に氣をとられて、周囲のことをおかしいほど見ていなかったのに氣がついた。

全くこの年は、初頭から大変な年であった。日本ばかりではない、世界史の齒車が狂ったようにはげしく廻りつづけて、何事かを頻りに人間どもに叫びかけている年だったのだ。

七月までのこの年の出来事を拾ってみると、

一月九日、アメリカ軍がルソン島に上陸して来ると、それから四日目の一月十三日には、日本の東海地方に大地震が起っていた。

戦争中でなかったら、これだけで大ニュースとなり、罹災者たちのために、国中の同情と救援が翕然として集っていたに違いない。